

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第四～六章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres IV, V et VI) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.57 (2013. 10) ,p.86(29)- 114(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20131031-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』（第四～六章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらずし

114 (1)

舞台は第二帝政初期のフランス、パリ近郊に住む中産階級の家、モープラン家の末娘ルネは結婚適齢期を迎えていた。そろそろいい相手を見つけてやらなくてはと気をもむ両親の心配をしり目に、ルネは結婚を自身の問題として考えている気配がない。何故か。お見合いを兼ねたパリの社交界に出入りする青年ルヴェルシオンとの、セーヌ川での水浴、その後の夕食といった、大胆さを含む出会いは、芸術、音楽にも豊かな趣味をもつ才媛ルネにどのような感興を抱かしたか。夜会で彼女は、わざとと思われる程にお転婆ぶりを発揮し、幼馴染みの、社会主義的思想傾向をもつ青年ドノワゼルを相手に悪ふざけに興じる。恰も、自らの手で自身の縁談を台無しにしようとするかのように。そんな娘の姿に、両親は思わず二人とも怒りを隠せなくなるのだった。物語は夜会が済み、ルネの兄アンリ、ダヴァランド家に嫁いだルネの姉アンリエット、ルネの代父の老人バルースらが連れ立って家を出、駅へと向かうところから始まる。

〔翻訳〕

四

「もう十時十五分よ！」とダヴァランド夫人が言った。「早くしないと、汽車が出てしまうわ。ルネ、私の帽子を取って来させて」

客は各々立ち上がった。バルースもその音で目を覚まし、パリから来た小集団はサン・ドニへの帰路に付いた。「お供するよ」とドノワゼルが言った。「気分転換になるから」

バルースは、ルヴェルシオンに腕を支えられながら前を歩いていた。それにダヴァランド夫妻が続いた。そして殿はアンリ・モープランとドノワゼルだった。

「何故、泊っていかないんだい？　パリに去るのは明日でいいじゃないか」とドノワゼルがアンリに話し掛けた。

「いや」とアンリが返す。「そうもしてられないのだ。明日は朝から仕事でね……もし泊ればパリに着くのは遅くなる……そうすれば一日の仕事を棒に振ってしまうことになるからね」

二人は黙った。バルースがルヴェルシオンに向ってルネを褒めるのが、夜闇のなか、彼らのところまで聞こえて来た。

「なあ、ドノワゼル、この話は破談になりはしまいかとぼくは恐れてる、そうは思わないか？」

「破談だろうな」

「おやおや、君、それならなぜ君は、今夜の妹の馬鹿騒ぎに、平気な顔をして付き合っているのか、ちょっと説明してくれないか？ 君の態度は妹に大きく影響するんだぜ、それに……」

「ねえ君」とドノワゼルは葉巻の煙をひと吹きしてから言った。「先ず始めに、歴史的にして哲学的、かつ社会的でもある余談をしたいのだが、許してもらえないかな。我々は、そう、ほくが我々と言うときは、フランス国民全般に就いて話をしている訳なのだが、我々はぜんまい仕掛けの人形の様に話し、会話のなかでパパとかママんとかの語を連発し、ダンスをしているときでも親の目を気にしている、そんな、いわゆる小さくて可愛いお嬢さんと云うやつを、卒業したんじゃないか。子供染みていて、臆病で恥かしがりやで、すぐ口籠って、無知になる様に育てられていて、一人じゃ居ても立ってもいられない、そんないたいけなお嬢さま、なんて過去のものだよ、古いよ、時代遅れだよ。それこそ、昔のジムナーズ座の芝居に出て来る結婚前の娘じゃないか……現代は、もうそんな時代じゃない。発育の仕方が変わったんだよ。かつては果樹牆みたようなものだった。ところが今の若者は、風に吹かれながら芽を伸ばして行くのさ！ 若い娘に、彼女の個人的な、率直な印象や意見を訊いてもいい時代なんだ。若い女は、言いたいことを言っている、いや、言わなくてはならない時代なんだ。世態風俗は変る。娘は最早、おぼこ振らなくなり、個性的な知性を表に現すようになった。今や娘が社会的に輝きのある存在になりさえすれば、両親は有頂天になってしまう時代だ。母親は娘を講演に連れて行く様になった。彼女に才能があったら？ その才能を孵化させようと暖める。嘗ての貧しい女家庭教師の代りに、親たちは本当のその分野の大御所を、コンセルヴァトワールの教授を、展覧会に入選する様な画家を、娘に宛がう。娘は芸術家の様相を呈し始め、周囲はそれを見てうっとりしている……どうだい、こんなものじゃないかね、現代のブルジョワ階級の娘たちの教育と云うのは、違うかい」

「それで君の言いたいことは終りかい」

「今度は」とドノワゼルはアンリの質問に答えずに続けた。「次の様な教育の現場に就いて考えてみよう、ほかはそれが良いものだとか悪いものだとか言うのではない、そこは注意しておいて貰いたいのだが、一人の極めておめでたい父親がいて、善良で優しくもあるのだが、女の弱さを鼓舞し物事に対する熱愛を奨励することで、例の解放運動全般の一助になっているとする。そんな父親が、女がどんな大胆な言動をしようとも、また凛としてどんな少年じみた振る舞いをしようとも、微笑を以て反応し、自分の娘が少しづつ男っぽくなるのを放置して、その性格に自分に似た所があるのを誇ってさえないとしたら……」

「ああ、君、君ほどほくの妹に就いて熟知し、どの様にして彼女が育ったか、父親に甘やかされることで彼女がどんな態度を身に付けてしまったか、総じて何が彼女を結婚から遠避けているかを良く理解している者もいない、そんな君が、今夜は妹のした沢山の恥ずべき言動を見過ごしてしまった、君の言うことなら彼女は聞くし、またあの場合、君こそが厳しく叱って彼女のしている行為をやめさせるべきだったんじゃないかな？」

アンリ・モープランがこの様に話し掛けている友人ドノワゼルは、父モープラン氏の同郷の学友にして戦友だった男の息子であった。モープラン氏とドノワゼルの父親は幾つもの戦鬪を共に潜り抜け、同じ戦場で血を流したのであり、ロシアからの退却の際には二人とも同じ馬の肝臓にかぶり付いたものだった。

フランスに帰還して一年ののち、モープラン氏はこの友人を失ったが、その息子ドノワゼルの後見は、いまわの際に友人が氏に託したのだった。ドノワゼルは後見人のなかに、彼にとつての父なるものを見出した。中学時代、彼は休暇の度にモリモンに来て過ごしていたこともあり、モープラン家は彼にとつては家族同然であった。モープラン氏の所に子供が出来る度に、ドノワゼルは待ち望んでいた弟や妹が出来たと感じ、自分は彼らの兄になったのだ、今改めて彼らと共にモープラン氏の子供になったのだと感じたものだった。

ルネはごく幼い頃からドノワゼルに好意を示していたこともあって、自然、彼の彼女に対する偏愛が形作られていった。早いうちから彼女はお転婆で、おまけに頑固であったが、ドノワゼルの言うことだけは聞き、従うのだった。彼女が成長すると、彼は彼女の性格、機知、そして趣味の形成に大きく関わった。そうして彼のこの若い娘に対する影響力は、彼の親密な態度と相俟って、部屋や食器を宛てがわれ普段から彼が一週間単位で過ごして行くこの家のなかで、日増しに目立つ様になった。

「まあ、時と場合によるのだけれども」とアンリは再びしゃべり出した。「妹の悪ふざけが颯爽でないこともある、が、今夜はなあ……あの青年の前で……縁談は台無しだな、間違いない！ 将来有望な、素晴らしい配偶者が見付かったと思つたのに……人脈に恵まれ、魅力的で、非常に上品な青年だったが……」

「君はそう思うかね。ぼくの方はと言えば、あの男は、全然、君の妹の為にはならないと思つたがね……今夜君が見ての通り、ぼくは彼女と一緒だつたんでそのところが良く分るのだよ。然しあの男の上品さに関して言えば、あんなものは平凡な、何処にでもある、優雅さを街つた通俗的なものじゃないか！ 見掛けも中身も、モードのポスターか、紳士服店のマネキンを思い出させる代物だ！ 空っぽだよ、あの手の見掛けだけが好人物の奴の中身は、薄っぺらと相場は決つてゐるのだ！ 君の妹の夫に彼を、だつて？……だけど、どうしたら、奴が彼女の良さを理解出来るんだい。どの様にしたら、奴が彼女の風変わりな見掛けの奥にある寛容さや、高貴なところや、その熱情を認識出来ると言うんだい？ 大体、あの二人の間に、共通の思想が見出せると思うか？ そんな馬鹿な！ 君の妹は、相手の男が知的で、豊かな性格と個性とを備えていて、自分が秘めている女の性を支配し震わせる何物かを持つてゐる男となら、相手が誰であれ結婚するだろうよ、そんな男なら僕は何も文句は無いのだ。ぼくはただ、ある種の男には、女の内面を生き生きさせる力が欠落している場合がままあるから注意す

る必要があると言っているだけだよ。一方、不良染みた奴が相手であっても、女がそいつに強い愛着を寄せる場合もあり得る、例えば君の様な野心家や実業家は、女に将来に対する展望や熱情や夢やを抱かせるじゃないか……だが今夜のあの手の小人ときたら！ 未来永劫！ 君の妹は不幸になって、石みたいになってしまふよ、彼女は死んでしまふだろう……彼女は、君の妹は、他の女たちとは作りが違うのだ、そのことはよく肝に銘じておなくてはいけないよ。その性質は上等で、自由で、とても冗談が好きで、この上なく優しく……要するに、
 ♪憂いを秘めたかしまし娘^レなのだ……」

「憂いを秘めたかしまし娘だつて？ 何だそりゃ？」

「説明しよう。それは……」

「アンリ、急げ！」とタヴァランドが停車場から叫んだ。「みんな車輛に乗ってしまふぞ……おれがお前の乗車券を持っているんだからな」

五

モーブラン夫妻は彼らの寝室にいた。振り子時計は重々しく、ゆっくりと夜中の十二時を告げたばかりであったが、その音は恰も、新婚の夫婦なら見詰め合い、それ以降の二人ならお互いに思うところを他人に邪魔されずに言い合う親密な、夫婦だけになれるこの時間が持つ厳肅さを刻印しているかの様だった。女が雌猫に変身する御伽噺を思い出させる、ブルジョワ的にして同時に悪魔的な、変貌と魔法の時刻である。寝台の天蓋の影が神秘的な雰囲気で人妻の上に落ち掛かる。横たわるその姿は、ある種の色香を湛え出す。この瞬間、恋人時代の魔性の残り香が彼女に蘇る。彼女の意志は、眠りに付いた夫が秘めている意欲の隣で目覚める。彼女はむつくと起き

上がって夫にけちをつけ、叱り飛ばし、拗ねたかと思うと、からかったり攻撃したりする。彼女は男に愛撫したその手で、爪を立てもする。枕に頭を乗せていると彼女に力が沸いて来て、夜が深まるにつれ彼女の体は力で漲る。

さて、モーブラン夫人はどうかと云うと、一本の蠟燭に照らし出された鏡の前で毛巻き紙を頭に付けていた。彼女は、キャミソールにベチコートと云う姿であった。短い腕が頭の方へ行ったり来たりしている彼女の太つちよの体は、裸に近い五十女の幻想的な輪郭を壁に映し出させ、ホフマンとドーミエが共作して古い家具のある閨房の奥に描き出しそうな、あの手の肉付きのよい人影を部屋の奥の壁紙の上に震わせていた。——モーブラン氏は既に床の中であつた。

「ルイ！」とモーブラン夫人が呼びかけた。

「何」とモーブラン氏は答えたが、そのアクセントには、目はまだ開いているものの水平に横たわつた状態の心地良さを味わい始めた男の無関心、無念な思いや嫌気が漂つていた。

「あら、もう眠ってしまったの？」

「まだ眠つちやいなさい。それで、何だい？」

「え、別にどうつてこともないけれど。今夜のルネはお行儀が悪かつたと思うの……それだけなんですけれど。あなた、お気付きになつて？」

「いいや。注意して見ていなかった」

「気紛れな物の言い方をしないで………注意していなかった筈はないでしょ………ルネはあなたに何か話し掛けてたでしょ、ねえ？ それも知らないつて言うの？ わたしはあんた方に隠し立てとか秘密があることを知っているのよ、わたしは何時も知らされるのは最後なんだから………だけどあなたは、ああ、あなたは何もかも話して

もらっている……嫉妬深い性格に生まれ付かなくて本当に合わせだわ、言ってること、分かるでしょ？」

モーブラン氏は返事をせず、毛布を肩の上に掛け直した。

「あなたは、完全にお休みの様ね」モーブラン夫人は、自分の激しい非難に対する夫の反論を待ち構えていた妻としての、苦い失望の調子を以て言った。

「さっき言ったじゃないか、まだ眠っちゃいないよ」

「じゃあ、私の言っていることが分らないの、あなた。まあ、男の人って、何て頭が良いんでしょう……面白いわ！ だけど今の話、結構関心があったでしょう、私と同じくらい、貴方にとっても重要なことだもの。ほら、また一つ結婚が駄目になったじゃない、分ってるんでしょ？ 本当に良い話だったのに……財産といい、高貴な家柄といい、全てが整っていたのに！ あたしには結婚の決め時がこういうものだとか分かってるのに……諦めるより他なさそうね……晩にアンリが言ってたわ、あの青年、アンリに結婚の話は、当然のように何もしなかったけれど、それはあの青年が世知に長けているからだって……彼が引いてしまうのをアンリは確信してるわ……そんなの明白だけど……人々の反応を見ればわかることだけれど……」

「それがどうしたって言うんだ。彼が引いてしまうだろうと云うことに關して、僕にどんな返答を期待しているのかな？」そう言うとモーブラン氏は上半身を起こして、両の手を太腿の上に置いた。彼は引いてしまいうだろう。でも、ルヴェルシヨンの様な若者は世の中にさらにあるし、また見付けることが出来るだろう……けれどもうちの娘の様な女の子はそうはいかない」

「また、すぐうちの娘、うちの娘って言う……」

「君はあの子の良さが十分に理解出来ないんだよ、テレーズ」

「わたしは、出来る限り彼女のことを理解してきた積りよ。ただ……わたしは、彼女の在りの儘の姿を見てい

るだけよ、私はあなたみたいに鼻屑目で彼女を見てあげられないのよ……あの子には欠点があるわ、とても大きな欠点よ、それも貴方が助長した、そう、貴方に責任があるんだわ、気紛れで、粗忽で、まるで十歳の子供みたいなじゃないの！……あの子を嫁がせようということになってから、私が見合いをお膳立てする人々を揃えるのに手間の掛かることと言ったら！ あの子は人と会って話すとなると口やかましくなるでしょ……あの子、一人につき十分くらいはあら捜しをするじゃない……」

モーブラン夫人の最後の言葉に、モーブラン氏は父親としての虚栄心が擽られて顔の表情が明るくなった。「そうそう」思い出し笑いで微笑みながら話し出した。「確かにあの子には辛辣なところがある……覚えていられる、あの知事、可愛そうな奴だったな、娘に、あら嫌だ！ あの人、老いた鶏みたい！……なんて言われているな。あいつを見る度に、すぐ娘がああ言ったときの表情を思い出すよ」

「その話は本当に面白いわ、あの人の形容としてはピッタリだと思っけれど……でも、そういう言い草が、結婚の妨げになっているのは、あなたにだって分かるでしょ……男たちだって名乗り出るのを差し控えるようになる筈よ。社交界では、ルネは意地悪だっという評判が立っているに違いないと思うの……それに時々言い回しが可成りきつくなるでしょ……それでもまだあなたには、これからも沢山の男たちがあの子に結婚を申し入れてくると思われるんでしょうけれどね！ 私はアンリエットを、とても簡単に嫁がせたわ！ あの子は、私の誇りよ……」

モーブラン氏は、ナイトテーブルの上から嗅ぎたばこ入れを取り上げると、それを親指と人差し指の間に挟んで転がしながらじろじろと見ている様子だった。

「結局は」とモーブラン夫人は続けた。「あの子のしていることは、あの子に跳ね返って来るんだわ……あの子

が三十歳になつて、誰でも彼でも嫌だと言ひ続けた挙句、もう誰も彼女に言ひ寄る者がいなくなつて……どんなにあの子が機知に富んでいても、幾ら善良さを秘めていたとしても、どれ程あの子があなた好みの子であつたとしても、そうなつたらもう遅いのよ……そこを、あの子は考えなくてはいけないの……それにあなたもよ……」

それから若干の間があつた。モープラン夫人は夫に一つの問題に就いて、一通り話し終えたのだということを理解させる為に間を空けたのである。そうして彼女は調子を変えて、「さあ今度は、私たちの息子に就いてお話しするわ……」

ここへ来て、それまで妻の言葉で打ち萎れたようになっていたモープラン氏は再び頭を上げ、善良さのうちにもずる賢そうな微笑を浮かべた。

ブルジョワ階級に於いては、その最も上流の家庭から、最も底辺の階層に至るまで、情熱へと高まる場合もあれば、愚行に墮する場合もある、ある種の典型的な母性愛を見出すことが出来る。母親たちは正しくそれにしほしほ嵌つてしまふのであつて、息子の前では、持ち前の優しさがひれ伏し、心全体が跪いてでもいるかの様になつてしまふのだ。正確には、それはもはや母性愛、などと云うものではない、何故なら、愛情の持つやわな部分は極力押し隠され、親の権利とでも言うべきものに後押しされながら、親の義務と云う名の下に加速され、家族内の上下関係と規律に拠つてその行為には尊敬と權威が与えられているからである。子供は、全き親愛の情を以て母親に擦り寄せられ、彼女から尊崇まがいの心尽しと、隷属を示すかの様な愛撫を受けるのである。母は息子に、彼女の夢の全てを賭ける、何故なら、息子は跡取りだと言うだけではなく、また家族の未来そのものでもあり、ブルジョワ家庭としての、財産の拡大、地位の向上、その世代ごとの昇進に就いて、期待を抱かせて呉れる存在だからである。母は息子の現在の姿に、また想像する未来の姿に惚れ惚れする。母は息子を愛し、そしてま

た息子の中に自らの栄光を見出すのである。母は息子に野心を賭け、そして息子に崇敬の念を抱く。こんな息子が、母には半ば人間を超越した存在であるかの様に思われ、この子を自分自身が孕んでいた事実ですら不思議に思われて来るので、こんな思いの奥底には、どうやら神の子の母になったと思ひ込んだ者の持つ傲慢と謙遜が緋い交ぜになつてゐるようなのだ。

モーブラン夫人は近代ブルジョワ家庭の母なるものの典型である。息子のあらゆる長所や、顔、その精神は、母にとつては或る種の神格の現れなのであつた。息子の人格に始まつて、その魅力、彼の言うこと、することは、母にとつては神聖な何かであつたのである。母は息子を前にすると、周囲の他の人の存在が見えなくなるのだつた。母にとつて、世界は我が息子に始まり、我が息子に終ると言つても過言ではなかつたのである。母にとつて息子は、全き欠ける所が無く、完璧で、すべての男のなかで、最も賢く、最も美しく、そして取り分け最も上品なのであつた。息子は近視で、鼻眼鏡を掛けていたが、母は息子の視力が低いと云う事実ですら認めようとはしなかつたのである。

一緒に居れば、母は息子が話したり、坐つたり、歩いたりする姿に見惚れてしまひ、彼が立ち去るのを、微笑を以て見送る。母は息子の服の襷までも愛する。息子が居ないときには、母はしばしば安楽椅子に深く身を沈ませて数分間を過ごす。そんなときには、彼女の顔は甘やかな想念で少しづつ輝き、また穏やかになるので、幻影、平穩、光明が同時に彼女に降り注いだよう、その視線は幸福を見詰め、その目の中には息子の姿があり、その胸は恰も息子への思ひを反芻してゐる風である。こんなとき、もし誰かが彼女に声を掛けたなら、彼女は正に夢から覚めた人の様な顔をしたことだろう。

この偏執的な母性愛は遺伝でもあつた。モーブラン夫人の家系では常に、息子に対しては、熱く、激しく、殆ど狂的に愛情を注いできた。彼女の一族に於いて、母は、恐ろしいほど母性を發揮してきた。彼女の祖母など、

オートマルヌ県に或る伝説を残したほどで、自分の息子より美男子だと定評のあった少年の顔を、熱い石灰で汚したと噂されたくらいであった。モープラン夫人は、息子が初めて体調を一寸崩したときなど、狂った様な形相になって、すべての健康な子供たちに対して呪詛を始め、あの子たちの命の代わりに、私の息子をお助けください、と神に祈ったのである。また或るときなど、息子が重い病気に罹るや、四十八日間にわたって夜の看病をしたので、疲労が祟って足がむくんでしまったものだった。病気が治り、息子が走れるようになると、母は息子がすることなら、何でも許した。例えば、息子が村の子供たちを殴ったと人が苦情を言いに来れば、母は優しい声で息子に、「坊や、大変だったねえ」と言ったものである。

やがて息子が成長すると、母親の魂は息子に先んじて進み始め、彼の男としての人生行路を一人で満たし出した。母は県の代表的な名家の娘を、行く行くは同い年の息子の嫁にしたいと夢想した。母は、息子が城館のなかに居たり、乗馬したり、赤い服を着て狩をしている姿に見惚れた。母は、息子の将来の幻影と展望に打ち震えた。

息子が中学校に入ると、母子の別れのときが来た。モープラン夫人は、自分のもつて、自分が家庭教師になって息子を育てるのだと言って、三月の間、息子を放さない為の抵抗をした。が、モープラン氏は頑強だった。結局、モープラン夫人が夫から許されたのは、何処の中学に息子を入れるか、と云う問題に口を挟む権利だけであったので、彼女は探し得る範囲で最も居心地の良さそうな、金持ちの子弟が通う、規律の緩い、メレンゲを食べながら散歩をしたり、叱るとき教師が、体罰よりも復習の宿題を課する中学校を選んだのだった。

息子が在学した七年間、モープラン夫人は一日も欠かさずサン・ドニから息子が休み時間に遊ぶ姿を見に来た。雨が降ろうが、寒かろうが、疲れているようが、気分が悪かろうが、そんなことはお構いなしだった。中庭の談話室では、そんな彼女の姿を、他の母親たちが噂し合った。息子は母を抱き締め、母が差し出すお菓子を受け取ると、終らさなきゃならない宿題があるんだと言いながらも、遊びの輪のなかへと駆け去って行く。だが、母には

それだけで十分なだった。母は息子に会うことができ、そして息子が元気だったのだから。母は絶えず息子の健康を気遣っていた。母は息子にフランネルのシャツを与えた。休暇で息子が帰省すると、母は息子に肉料理をたっぷり出し、大きく、また強くなって呉れることを願って、血の滴るような牛のヒレ肉のステーキを食べさせた。母は息子に、教室でお尻が痛くならないよう座布団を買い与えた。中学は寄宿制であったが、母は息子の部屋に、一人前の男の部屋の様な家具を備えさせた。それゆえ息子は十二歳にして、紫檀の化粧ダンスを持っているのである。

少年は青年になり、モーブラン夫人は情熱に駆られ、言葉遣いが変わって髭が生え始め、大きく成長した息子を見て心から満足しつつ、中学を出た青年を偉人視するばかりであった。母は息子の着こなしや帽子の被り方、靴の履き様にうっとりしてしまうので、それらを購入する際には商店にまだ代金を支払っていないことさえ忘れる始末だった。息子が愛好する趣味や豪奢を好む習慣、彼の漂わせる雰囲気やその生活自体には、ある種の華麗さがあり、その前で母は驚きと陶醉感を以て、頭を下げてしまう、その姿は恰も彼女自身がこれら息子の生活の庇護者であることを忘れていたかの様であった。母にとっては、息子に仕える召使は、唯の召使ではなかった。息子の馬は矢張りただの馬ではなかったので、母はそれを息子の馬として聖別した。息子が外出するときには、母は息子が馬車に乗って出立つ勇姿から得る満足感でいっぱいになるのだった。

日毎、母が息子を思う気持は強まる一方だった。気晴らしも、思索癖も、読書の趣味もない母は、愛欲を少しも満たして呉れず、また学問、政治、事業のなかに閉じ籠って彼女自身から距離が感じられる夫のそばで年を取り始めた自分の年齢を意識し、また心から接することの出来ない長女をかたわらに見るにつけ、結果、彼女の全生命を息子アンリの運命に賭け、また彼の将来のなかに、彼女の虚栄心のすべてを投入したのだった。

そうして母が考える唯一のこと、彼女が日夜、四六時中思い描いていること、即ち彼女の固定観念は、この愛

しい我が息子を結婚させる、勿論良い条件で結婚させること、要するに金銭的にも社会的にも十分満足のいく相手と結婚させることであつたが、それは、息子の結婚が、彼女の寂寥感や埋没した生き方、また燃焼することのない孤独な日常や、女として妻として満たされたためしのない欲望の埋め合わせとなり、代償となるからなのであつた。

「息子の年齢に就いてだけでも、考えたことがあるかしら、あなたは」とモープラン夫人はまたしゃべり始めた。

「アンリか！ ええと、待てよ、君、アンリは確か……一八二六年生まれだつた筈だよねえ」

「あらあら、息子の年を訊ねるなんて、いいお父さまですこと……そう、一八二六年よ、一八二六年七月十二日ね」

「てことは、あれは今、二十九歳か……」

「そう言つてあなたは手をこまねいてしまうの？ あの子の将来に就いてそれ以上考えてはあげられないの！ あなたは、ほう、あいつももう二十九歳か、なんて言つて、呑気なものだわ！ 父親によつては、息子の嫁を躍起になつて探してやる人もいるのに……アンリはね、あなたのルネとは違つて、結婚したがつているのよ……あなたは、配偶者となる人を、妻を、息子の為に見付けてやろうとしたことが一度もないでしょ？ プロシア王の結婚相手のことの方が関心ある位でしょう！ 長女の結婚のときもそうだつたわ……わたし、あの子の結婚のとき、あなたが取つた態度について一寸お尋ねしたいんだけど。あの子が相手を見付けようと思つてはならないほどどつちでも構わないといった感じだつたわね。あなたに関心を持たせる為には、後押ししなくてはならないくらいだつたじゃない！ おやおや、あなたはあの結婚のことに関しては、何もかもお忘れの様ね、あの子の幸

福など、あなたの意識には、これっぽっちも上らないだわ！ 私がいなかったら、あなた、ダヴァランドさんみたいな……アンリエットを深く愛して呉れて、然も社交界の花形で……良人の鑑みたいな、あんな娘婿を見つけること、出来たと思ふ……」

そう言うときモーブラン夫人は蠟燭の火を吹き消し、寝台のモーブラン氏の隣に滑り込んだが、氏に背を向けて、壁の方に顔を向けてしまった。

「そうよ」と妻は毛布の下で、なお一層体を伸ばしつづつ言った。「もしあなたが、一般の娘婿のなかにも、彼と同じくらい、嫁さんの両親に対して気を遣って呉れる人が沢山いると思つてゐるのなら……あの、わたしたちが喜ぶ様に、何時も取り計らつて呉れているのよ……彼がうちの晚餐に来るとき、あなた、彼に散々お肉食べさせるでしょ、彼は無理して食べているけれど、何も言わずに……気を遣つて呉れているのよ！ だからわたし、最近、つづれ織りの羊毛の、アンリエットが持つてゐるのとお揃いの服をプレゼントして埋め合わせしたんだわ……」

「あ、すまん、君、僕らは何に就いて話してゐたのだつて？ 言つておくけれど、僕は今晚、一寸眠たいのだけれどねえ……僕らの話は、長女の話から始まつて……で今君は、ダヴァランドさんの話の大話を迎へてゐる……そこ迄は知つてゐるのだが……明朝まで時間はたっぷりあるのだし……なあ、君は息子を結婚させたいのだつたね？ そうだつたね。それなら、僕は何も言うことはない。息子を結婚させよう」

「そんな一言で息子の結婚をあなたにお任せできる訳ないでしょ！ 貴方は面倒臭がりだし……貴方は堪え性がない人なんですもの！」

「冗談じゃない、そんな、君、それは正確ではないよ……確か、二週間前か、いやもっと最近だ、証拠を示したじゃないか……下手な歌手のオペラを聴きに行つてやつたじゃないか……その夜は、好きでもない氷菓子を

食べてやったし……ブルヴァールで奴さんの娘の持参金の額を大きな声で話す様な田舎者と取り留めも無い話もした……これでもまだ君は、僕に堪え性がないと言うのか！……あのお見合いは相手が悪かったって君は言うのだろう？ だけど、あの親父が自分の娘婚には、自家の息子よりもっと男らしい奴が欲しいと言つて来たのは、それは僕の責任かい？ 僕らの息子がヘラクレスの様な体格でないのは、それが一体、僕一人の責任だろうか？

「あなた……」

「そうだ、要するにその通りだ……僕がすべて悪いのだ、それから君も……君は僕一人をエゴイストと云うことにしているけれども……」

「ああ！ もう嫌だわ、男つて何でこうなんでしょ……」

「お生憎様だね」

「いや、男一般じゃなくて、あなたの性格の問題だわ……じゃあ、もういいわ……苦勞するのは母親だけなのよ……ああ！ あなたが私の様な人格だったら……もしあなたが目の前の息子の姿に、絶えず注意を払って呉れるだけの配慮があつたなら……アンリが理性的な子だつてことは、わたしよく分つてるの、だけど大分以前から入れ込んでいるらしいのよ……ろくでもない女、悪い女に……無茶苦茶よ……それは何時会つても感じるわ……気が変になりそうよ！ ねえ、あなた、ロジエール夫人に相談してみない？」

夫からの返事は無かった。モーブラン夫人は諦めて口を閉じ、布団のなかで身を翻し、また翻して眠りに就こうとし、漸く明け方になってまどろんだだけであつた。

「おやおや、君は何処へ行く積もりだい？」朝になり、モーブラン氏は、鏡の前で黒いレースの短外套を羽織っている妻に向つて訊ねた。

「何処へ行くかですって？」モーブラン夫人は口にくわえた二本のピンの内の一本で、短外套の肩を留めながら返事をした。「私の短外套、ずり下がり過ぎてない？……ねえ見てよ……」

「ずり下がり過ぎてはいないよ……」

「一寸引き上げてくれない？」

「おや、君、今日はまた何て綺麗なんだ！」モーブラン氏はそう言うと、二三歩後退して、妻の身繕いを眺めたが、その姿は黒を基調としており、極めて無駄の無い華麗さであり、殆ど厳格とでも形容したくなる様な趣味の良さを反映していた。

「わたし、パリに行くの」

「へええ！ 君がパリに行くの？ パリに何をしに行くの？」

「驚いたわねえ！ 何処行くの？ 何をしに行くの？ なんて普段は訊いて呉れもしなくせに……今日は知りたいの？」

「仔細はない、ただ訊ねているだけさ……」

「あなた、わたしね、懺悔しに行くの」とモーブラン夫人は視線を落としながら言った。

モーブラン氏は言葉に詰まった。結婚した当初の妻は、日曜日ごとにミサに通う女らしい信仰心を持ち合わせ

ていて、やがては娘たちを教理問答に連れていくようにもなり、夫はそれらを通して妻が宗教上のすべての義務をこなすのを認めたものであった。だが十年この方、夫は、妻が彼のそばにいるうちに、風化するように、然しまた邪気なく、自分と同じ様に宗教に無関心になっていくのを感じていた。それだけに今日の妻の豹変振りに一頻り驚かされたあと、妻に何か言おうとして口を開き、彼女を見詰め、結局何も言わず、突然蹀を返すと、どうにかこうにか節と歌詞とを覚えていく程度のアリアの様なものを鼻歌で歌いつつ部屋から出て行ってしまった。

マドレーヌ街の美麗な建物に到着したモーブラン夫人はその五階まで上って、飾り気のない戸の呼び鈴を鳴らすと中から人が出て来た。

「ブランポワ神父様のお宅はこちらですか？」

「ここで御座います、奥さま」黒いお仕着せを身に着け、控えめな目付きをした召使は、ベルギー訛りでそう言うと、会釈した。彼はモーブラン夫人に、うつつすらと心地良い匂いが漂う控えの間を通らせ、それから陽光がいったいに差し込んでいる食堂を通過させたが、そこにはテーブルの上に一人分の食器類が準備されていた。やがてモーブラン夫人は花で飾られ、それらの香りに満たされた一室に至った。たくさん象眼が施されたパイプオルガンの上には、コレージュの『夜』の複製が掛けられていた。他の壁面には黒い縁取りのある、コンシエルジュリーに於けるマリール・アントワネットと彼女の近衛騎兵たちの聖体拝領の図が掛けられていたが、キャプシヨンに拠ればその絵は石版画だと云うことであった。思ひ出の品々が、新年の贈り物みたいに沢山、所狭しと飾り棚に並んでいた。カノーヴァ作のマグダラのマリア像のブロンズ製のミニチュアが部屋の中央のテーブルの上に置かれてあった。おのおの異なつたつづれ織りが掛けられた、信心を込めて作られている幾つかの家具は、自ずとそれらが敬虔な信者からの神父に対する贈り物だと知れた。

そこには幾人かの男女が待つており、神父の部屋の戸を開け、中で数分間を過ごし、再び出て来て、挨拶をし、去って行く。待つていた人々のなかの一番最後の人は女性だったが、神父の部屋の中に長く留まつていた。彼女が出て来たとき、モーブラン夫人は二つ折りにしたスカーフに包まれた彼女の顔を見ることは出来なかつた。モーブラン夫人が部屋に入ったとき、神父は暖炉の前に立つていた。彼は暖炉の前でスータンの裾を燕尾服のその様に広げていた。

ブランボワ神父は主任司祭の職に就いている訳でもなく、また小教区を受け持つてている訳でもなかつた。彼はある特定の人々を相手にしている丈であつた。彼は社交界の神父であり、華麗な社交人士を数多く受け入れていた。彼は幾つもの社交界の聴罪師をしており、家柄の良い者たちの良心を善導し、贖罪を求め魂に慰めを与えていた。彼はイエス・キリストを、知識人たちの納得の行く形で示し、また天国の概念を富める者たちにも受け入れ易く伝えた。「誰もが、神の葡萄畑にその配当の土地を有している」と彼はしばしば言つていたが、フォブール・サン・ジェルマンやフォブール・サン・トノレ、シヨセ・ダンタンの人々に救いを齎す任務の重さに呻き、腰が砕けてしまつてゐるかの様にも見受けられた。

彼は感性と機知に富んだ男で、気難しいところが無く、「文字は殺し、霊は生かす」と云う掟に全き従つた僧侶であつた。彼は寛容にして聡明であつた。話の分かる、微笑みを絶やさぬ人物であつた。相手の氣質に合せて信仰上の要求を調節し、然も少しづつ課する丈であつた。彼は贖罪を軽減し、重たい十字架を背負わず、救いへの道を歩み易いものにした。貧しき者たちの荒く、目も背けたくなるほど厳格な宗教を、薄めてゆくよきな形で、富める者たちの宗教とでも呼ぶべき物を作つたが、それは軽やかで、魅力的であり、柔軟性があつて、物理的にも心理的にも無理がなく、社会のあらゆるしきたり、風俗、習慣、偏見にまでも順応してゐた。神の教

えから、彼は心地よい、然も華麗な何物かを作ったのであった。

ブランボワ神父は教養が豊かで、才覚も品格もある、魅力的な聖職者だった。彼は告白を聞く際、上手におしやべりを交えたり、訓戒に皮肉を込めてみたり、宗教的情熱に楽しみを漂わせたりした。彼は人を感動させたり、人の関心を引いたりする術をわきまえていた。彼は人の心の琴線に触れる言葉、相手を心地よくさせる言葉、心をくすぐる言葉を熟知していた。彼の声は音楽的であり、その調子は華やいでいた。彼は悪魔を、「悪の王子」と呼び、聖餐を「神の食糧」と呼ぶ。彼は、聖なる者のイメージがそうである様に、回りくどい表現を色彩豊かにたくさん用いた。ロッシーニに就いて語り、ラシーヌを引用し、ブローニユの森を「森」と呼び習わしていた。彼は神の愛を、心を掻き乱す様な言葉で語り、日常の悪徳に就いては、刺激的な特徴ある調子で語り、社交界に関しては、社交界の言語で話す。時折、流行の極めて新鮮な用語や日常の言語に属する言葉も、信者から相談を受けている際には飛び出し、恰も禁欲的な内容の書物に、新聞からの抜粋が混じっているかの様な印象を受ける。彼は十九世紀と云う時代の感覚を体得していたのだった。彼の僧服からは、彼に告白された、すべての麗しい過ちが漂って来るかの様だった。彼は洗練された人々の間での誘惑の問題に関しては、深く鋭い理解を示し、淫蕩の問題を論じるに際しては明敏で、いわゆる嗅覚を利かせた、然しまた礼儀を忘れない解決を見事に示してみせる。女性たちはそんな彼の振舞に夢中になってしまうのだった。

聖職者としての彼は、最初の一步、お目見えのときから、信者たちの魂を誘惑し、恍惚とさせたが、それは輝かしい勝利と云うよりは、寧ろ醜聞と取られ兼ねない規模の成功によって記された。某小教区で公式初聖体後に続ける公教要理を一年間担当した後、大司教が彼を別の任務に就かせ、彼のそれまでの仕事は他の指導者に引き継がせたが、それが、反発を引き起こした。少女たちは皆、新着者を受け入れず、彼の話を聞くことを拒絶した。彼女らの小さな心と、小さな頭は昂揚した。集まりは涙で満たされ、哀惜の念が腹の底からの反抗を惹起し、す

ぐにブランポワ神父の異動に対する抵抗運動へと変わった。彼の公教要理に参加していた者のなかの最年長者で慈善事業の委員でもあった者たちは、数ヶ月にわたって戦いを続けた。彼女らは集まりに参加するのをやめる為に団結したが、やがて集金して預っていたお金を主任司祭に渡すのを拒否する事態にまで発展した。彼女らを有める為には、相当な努力を必要とした。

この様な出来事がブランポワ神父に予感させ、予期させた運命は、違わず的中する結果となった。神父の評判は瞬く間に広がったのである。パリに於いては、あらゆる事物に関わり合いを持ち、聖職にまでも影響力を持っている、いわゆる流行と云うものが神父を担ぎ出し、その名を馳せさせたのだった。各界から人々が彼を目掛けて押し寄せてきた。何処にでも有る様な過ちの告白は他の神父たちに任せた結果、彼に持ち込まれたのはこれぞ彼に聴いて貰わなくては、と云った類の罪の告白であった。彼の周辺には有名な名前、莫大な財産、麗しい悔悟、美しいドレスが轟いていた。母たちは自分の娘を社交界にデビューさせるに際し、神父に相談に来る為、彼のもとで娘たちはお披露目前に華やいしてしまうのだった。ローブデコルテを着る許可を取り付けに来る者もあり、彼はこれ位までなら舞踏会のドレスの肌を露出しても構わないといったことのほか、これこれの書物を読んで、も道徳には反さないと云った内容も取り決めていたので、人々は読んでよい書物の題名や観てもよい道徳的な演劇の一覧を訊ねたりした。彼は初聖体を準備させたり、結婚を取り纏めたりした。子供に洗礼を受けさせる一方で、心の中で姦淫を犯した女性の告白を聞きもした。過小評価され誤解されている妻が訊ね来て、夫の精神性の欠如に就いて語って傍でむせび泣くときには、妻がその夫婦間に掲げ得るほんのささやかな理想を目標として示してやるのだった。絶望や大きな悲しみが彼に助けを求めて来たときには、イタリアに旅行し、絵を見たり音楽を聴いたりして気晴らしすることを奨励し、その際、ローマで確り告白もして来るよう言い添えた。別居した妻は、波風を立てず夫と繕いを戻す方法を神父に訊ねた。彼の役割は嫁の愛と姑の嫉妬の間に入って調停すること

であった。母親たちには家庭教師を付けて教養を磨かせ、娘たちには四十の小間使いを与えて人生を学ばせる様にした。新婚の女性は彼から、如何にすれば夫婦の仕合せを手放さずにいられるかを学び、慎みや、お洒落の洗練、また清潔さ、心遣い、処女性を忘れない上品な肌着類等で夫を繋ぎ止めておく術を教えられた。「可愛いわが子よ、正直な女はまた、ほんの少し浮かれ女の様な香気を漂わせていなくてはならない」と彼は時々言ったものだった。彼自身の経験が結婚の衛生学を語る場合には生かされていた。母性は彼の知性の光に援助を求め、妊娠した女は彼の予測に耳を傾けた。彼はある女が母になる、あるいは母になった女がその子を産む決心を促す役割を担っていたのだった。

この流行、この役割、この様に女性を私生活にまで分け入って指導し、女性のあらゆる秘密を所有し、沢山の打ち明け話や知識を耳にすること、慈善事業を通して知り合う全分野にわたる高位の人々や経理係の女性たちとの多くの人間関係、施しの過程と利害関係により正当化され得るパリのお歴々との幾多の継続した付き合い、謙虚で世話好きで手馴れた聖職者が身の回りに引き寄せ得るあらゆる勢力、それらがブランポワ神父に、あの、知る人ぞ知る輝きに満ちた或る種の権力を与えた。更に、様々な利益が彼に囁き掛けた。社会的な野心が彼の懇篤に擦り寄ってきた。そうして、政治色がなく、社交界全体に名が知れわたり、家名と家名とを近付け、家族を交わらせ、便宜を突き合わせ、地位の公平化を図り、財産を結び付け、古い称号を新興の財力に結び付ける為には持つてこいの立場にあるこの聖職者に、社交界で婚期を迎えた子弟を抱える殆どありとあらゆる家庭が殺到した。パリ社交界内での結婚は、内側に僧侶と代訴人、使徒と外交官、フェヌロンとド・フォワ氏を併せ持っているこの稀有な人物のなかに潜む、秘密の神意に起因しているかの様であった。

ボンプロワ神父は四万リーブルの年金があったが、その半分を彼は貧しい人々に施していた。彼は今のままでいる為、即ち一神父として仕事を続ける為、司教の地位を拒否した。

「光栄にも私がこうしてお会いしているのは……」そう言いつつ、神父は記憶の糸を手繰って名前を思い出そうとするらしい表情をした。

「モーブラン氏の妻です……ダヴァランド夫人の母の……」

「あ、失礼、奥さま、失礼致しました……それではどうぞこちらの椅子にお掛けください」

そう言うと、窓の光を背にして坐り、彼女と向き合い、再びしゃべり出した。

「貴女とお知り合いになるきっかけになったあの結婚、貴女のお嬢様とダヴァランド氏との結婚は、私には大変良い想い出になっております。私たちは、貴女と私とは、あの折には、真にキリスト教徒らしい、あの可愛い娘さんの信仰上の必要、心の欲求、或いは社交上の地位から来る要請にもすべて対応した結婚を実現致しましたね、貴女は、奥さま、母としての貴女らしい献身を以て、私はといえば、嗚呼、神よ！ ささやかな聖職者としての、乏しい智慧の光を以て。ダヴァランド夫人は、私の代表的な告解者の一人で、どんな点に関しましても私は満足致しております。ダヴァランド氏は、今日大変稀なことですが、妻の宗教的感情を共有できる素晴らしい若者です。あれほど幸福で、またあれほど品格のある夫婦は心の拠り所となるものですから、貴女がいらしたの、可愛いあの子たちに就いての相談の為ではないことは既に確信致しておりますけれども……」

「その通りで御座います、神父さま、そちらの方面に關しましては、私は非常に仕合せで御座います……彼らの幸福は、私の人生に於ける大きな喜びで御座います。彼女の子供たちを結婚させると云う大きな責任も御座いますし！ ですから、神父さま、今日わたくしが貴方さまのもとに参りましたのは、あの子たちの為では御座いませんので、私自身の為なので御座います」

「貴女自身の為で御座いますか？ 奥さま」

そう言うと神父は鋭い視線を彼女に投げ掛けたが、直ぐに優しい眼に戻った。

「ああ！ 神父さま、年月は大きな変化を齎しました……わたくしの様な年齢になるまで、人は多くのことで
 気晴らしをするもので御座いますわね、例えば、社交界に出入りし、多くの人々と交わって……そういうことの
 すべてが愉しい。気を紛らわし、社交そのものを愛し、信じ、そこを拠り所とする……仕舞いには、社交以外に
 はもう何も要らないだろうとまで思う様になる……ところがです！ 神父さま、私は、他のことが必要な年齢に
 達したのです。お分かりになられるでしょうか……わたくし、社交界の空虚さを感じる様になりましたの。何事
 につけても興味を引かれることがなくなりまして。わたくし、自分が放棄して参りましたことに戻りたく思っ
 ているので御座います。わたくしは神父さまが、どれほど寛大であられるか、貴方さまの慈悲がどれほど深いもの
 であるか、分っている積りで御座います。貴方さまの忠告が、お導きが必要なので御座います、わたくしが余り
 にも長きにわたって見返りもせず、とは言うものの絶えず理解をもち、尊重もしてきたすべての宗教上の義務に
 わたくしが連れ戻される為には。この様な哀れな状態を、神父さま、ご理解頂きますか？」

パリの表現で「口達者」と呼ばれる女性一般の、或いはパリジェンヌの軽やかな語り口を以てこの様に話しな
 がら、モープラン夫人は、暗がりのなかでどうか感知出来る程度の神父の視線を避け、仕事に追われる男に相
 応しい、いかめしく勿体ぶった、冷やかな部屋、その部屋の真ん中で輝き、一条の陽光に赤く照り映え、神父の
 手が揺らしている光の方向に機械的に視線を落した。この光というのは、神父が指で弄んでいるダイヤの入った
 寶石箱であった。

「ああ！ これは」神父はモープラン夫人の視線に気が付き、彼女の考えていることを見抜き、彼女の話して
 いたことには返事をせずに言った。「驚きになられたでしょう。ああこれね、寶石箱……寶石箱です……ダイヤ
 モントの……ほら、ご覧ください。なかなか綺麗でしょ」そう言うと、神父は夫人に首飾りを差し出した。「妙
 なもので御座いますしょう？ こんな所にこんなものがあるなんて。どうお考えになりますか？ 我々の時代に

生きる者は、凡そすべての物と関わりなくては生きていけないのです……悲しい場面に遭遇致しました。あの涙……あの啜り泣きがまだ耳から離れません……恐らく、先程聞こえていたのではありませんか？ 或る不幸な若い女性が私の足元に身を投げ出して、それが家庭の主婦なんで御座いますよ、奥さま、残念なことで御座いますなあ。世の中はこんなもので御座いまして……お洒落に凝ったり、人の目を引こうとあくせくするうちにこう云うことになったのですよ。浪費して、浪費して、やがて借金の利息ばかりが嵩んで、店には一銭も支払うことが出来なくなる……そうなんです、奥さま、こういうことはあるのです、この手の買い物物をさせる幾つかの店の名を折を見てお教え致しますが……何時か現金で払い終える日が来るのを期待せずにはいられません……何でも相談し易い性格の娘婿がおりまして、義母の借金を返すのにやぶさかでないとの意思を示しそうで、彼に期待が掛かってはいるのですが……でもこうしている間にも、例の幾つかの店は痺れを切らしております……或る時なんか、夫にすべてをばらすぞ、何て脅して来たくらいでして……さて……ああ！ さてさて！ そんな苦惱を想像してあげてください。それでさっきなんか、入水して死にたいなんてことを私に言い出すものだから、お分かりでしょう？……三万フラン用意しておきますよ、と約束せざるを得ないじゃありませんか……あ、本当に申し訳御座いませんでした、私事を貴女にお話ししてしまつて……貴女の方に、貴女のお話の方に戻りましょう……下にも娘さんがいらつしやいましたね……魅力的な……彼女の初聖体の準備をしてあげたのでしたつけ……ええと彼女のお名前は……」

「ルネです」

「その通りで御座いましたね……とても賢い、とても活発なお子様で、個性のお強い……時に、彼女の結婚はまだでしたか？」

「はあ、神父さま、それが未だなので御座いまして、私の大きな心配の種なので御座います。何か良い考えは

無いものでしょうか……あの子は長女にはちつとも似ていないのです。母親にとつては歓迎できない性質の持ち主なものですから……あの子があと少しだけほんやりした所のある子だったらと思つてしまふのですけれど……私たち夫婦はあの子にびつたり配偶者を何度も見付けてあげたのですよ。それなのにあの子はそれを大きな声を出して、激した調子で拒否して来たのです……昨日もまた……そんなことがあつた後、夫があの子を甚く甘やかしまして……」

「ああ！ それは残念ですね。イエス様やマリア様の下で洗礼を受けたお子さんには、母としての愛情を注ぎ続ける努力が必要です……ところで、貴女の息子さんのことはまだ聞いていませんでしたね……人の気を引く若者でしたね、非常に善良な、それに、お見受けした所では、結婚適齢期だと思いますが……」

「あの子をご存知ですか、神父さま」

「一度、彼の姉のダヴァランド夫人の家で、彼と会つたのが良い思い出として残つておりまして、あれは彼女が病氣になり、そのお見舞いに私がお尋ねしたときのことでしたが、ご存知だとは思いますが、私たち神父が信者の方の家をお尋ね出来るのはご病氣の時くらいのものですからね……それから、彼に関しましては、沢山の良なお噂を耳に致しております。貴女は、母親として幸福ですね、奥さま、何しろ息子さんは有為な人材ですから。復活祭の折には、イエズス会の神父たちのもとで聖体を拝領致しました。貴女には恐らく告げてはいないと思いますが、彼は社交界のなかでも、真にキリスト教を信じているあの一群の方々のお一人であり、告白の為に、殆どひと晩、待ち続けた位なのです、それほど込み合つていたという訳で！ まあ、これは信じがたいことですが、ありがたいことに！ 事実なのです。多くの若い人たちが、彼らは本当に善良な人たちですが、朝の五時まで、告白の順番を待ち続けておりましたよ。言うまでもないでしょうが、教会がこれほどの情熱に感銘を受け、道徳の解体と不信仰の広がるこの時代に、このような慰藉を与え、敬意を払ってくれる彼らに深く感謝し、またそれ

故に、我々教会に仕える者は皆、模範的な良い意志を持つ青年たちの為に、微力ながら彼らの支えとなり、家族内での問題にも解決の糸口を見出せるよう努力する準備を何時も整えているのでして……」

「ああ、神父さま、貴方さまは何てご親切なのでしょう……わたくしたちは、わたくしとあの子は、幾ら感謝してもし足りない……神父さまが我が息子のことを気に掛けていてくださるならば……神父さまにお会いしに行くという考えは間違つてはおりませんでしたわ。そうですね！ わたくしは女としてのみならず、母としても貴方さまにご相談申し上げたくて参つたので御座いました……わたくしの息子は天使の様に良い子なのですよ、神父さま……それに、貴方さまは、本当に沢山のことがお出来になる方でいらつしやるから！」

神父は謙譲と憂愁の混じり合ったような微笑を浮かべつつ、頭を横に振つて否定した。「それは違います、奥さま、過大評価していらつしやいます。我々聖職者は貴女が仰るような存在ではありません。我々は時として、善を為すことが出来たとしても、その善の小ささ故に、酷く悩むことがあるのです。今日のような時代にあつては、聖職者がどれほど微力なものかを、貴女がもし、お知りになられたとしたら！ 人々は僧侶からの影響を極力回避しようとし、距離を取り、教会以外では会おうとせず、告解室でだけ我々に話し掛ける……貴女御自身奥さま、聴罪司祭が貴女の日々の生活に口出しして来たら、矢張り戸惑いを覚えられることでしょう。距離を取ろう、洗い浚いはしゃべらないでおこう、これが、社交界に於ける我々に対する嘆かわしい偏見から生じる態度です……」

「あら！ どうしましょう、もう一時では御座いませんか……ここへ参ります途中、貴方さまの食器類がテーブルの上に用意されているのを見ましたわ……わたくし、お恥ずかしゅう御座いますわ……二三日後に、また出直して来るのをお許しくださいませね……」

「私の昼食など、何時でも構わないのです」とブランポワ神父は言った。そして、傍らに書類が積み上げられ

た仕事机の方へ戻ると、モーブラン夫人に再び腰掛けるよう、手振りで指示した。それから僅かな沈黙があり、その間は神父が書類をいじる音以外、何も聞こえなかった。やがて神父は書類の束から一枚の隅の折られた名刺を抜き出し、それを日の光の方へ向けるとそこに書かれている文字を読んだ。「三十万フラン、国債、社債……結婚の日に十五万リーブルの年金……両親は亡くなっており……結婚してはず、これからも婚姻関係を結ばないおじ達やおば達の死に際して六十万フラン……若い娘……十九歳……魅力的で……彼女自身が思っているよりずっと美しい」お分かりになられましたね、お考えください」名刺を書類の山のなかに戻しながら神父が言った。「さてさて、お次はですね……まだ有るのですよ……そう、今結婚すれば、二十五万リーブルの年金付きの娘がおります、孤児なんですがね……いや、これは駄目だ、後見人が勢力を張り度がつておりますもので、彼は二級の会計検査院検査官なのですがね、彼を一級に昇進させて呉れる地位にある娘婿にしか彼の世話している孤児を嫁がさない筈ですから……ああ！ お待ちください、これは多分……」そう言うメモを繰りながらそのうちの一枚をはたと落として言った。「二十二歳、美人ではないが……芸事の才に長けており……頭が良くて、お洒落で、父親は十五万フランの資産があり、三人の子供の親にして、確りとした財産もある。先ず、治安局があるプロヴァンス街に家を持ち、オルヌ県には地所があり、不動産銀行に二十万フランの貯金がある……」ポルトガルの出身で、なかなか頑固な男ですよ。で、母親ですがね、家庭内では蔑ろにされているのです。彼女は家族と離れて暮らしておりますので、もし貴女がこの娘の二親に会い度があれば、父親は貴女に対して気分を害するかも知れません……私は何も隠し立ては致しませんよ、宜しいですね……夫婦は年に一度、人の仲介で晚餐を共にしていると言う、唯それだけの関係です……父親は三十万フランの持参金を婚姻に当っては差し出すことですが、他方娘は結婚した後も手元に置いておき度がつているのです」

そう言うと、更にメモの束を繰りながら神父は言った。「そうですね、以上が今のところ貴女にご推薦出来る

すべてです……お分かりですね、これらのことを息子さんとよくお話しになられてください、奥さま。ご主人にもご相談なさってくださいね。私にも何時でもお問い合わせてください。もしお出来になりますなら、次回いらっしやる際に、収入や財産等に関するメモをお持ち頂けますか……息子さんにどの程度の娘を貰い度いとお考えでおられるのかを知る縁になりますので……それから、貴女の下の方の娘さんをお連れくださいね、あの可愛い娘さんにまたお会いするのが楽しみです」

「もしお宜しければ、神父さま、今日の様子にお邪魔にならないお時間を、ご指定頂けますか？」

「私ですね、奥さま、私を必要としているすべての人のもので、それで私は十分過ぎる程の誉れを頂いております……二週間後にここにまた来て頂ければ結構なので……当面ずっと田舎に滞在し、パリにはその日一日しか戻って来ないものですから……実際、解決しなくてはならない急用が御座いましてね、とてもくたびれた状態で冬の終わりを迎えます……たくさんの仕事を抱えておりますものですから……それにこの五階家で忙殺されてもおりますし。時に、何かお望みですか？ 礼拝堂を所持する権利を得る為には少々の額を払う必要はありますが、そうすれば自分の家でミサを執り行う貴重な許可が得られます……礼拝堂を作れば、ご存知でしょうが、その上の階では何人も就寝してはならない決まりですけれども……ああ！ そうだ、私思うのですが、貴女、田舎まで、コロンブまで私に会いに来られては如何でしょうか？……散歩がてらに。沢山の果物もありますし……いえね、一寸した、私の自慢の土地が有りましたね。気さくにおやつ等、召し上がって行かれてください、奥さまも、お嬢さまも……貴方の優秀な息子さんも勿論、大歓迎ですよ」

※当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Maupérin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 77-100.